

中国を睨んだ、米比大規模軍事演習はじまる

日本や ASEAN 諸国もオブザーバー参加

樋口 譲次

○米比合同軍事演習「バリカタン 2024」はじまる

4月22日（月）、米比（フィリピン）合同軍事演習「バリカタン 2024」がはじまった。この演習は、中国の野望を絶つ上で、極めて重要な演習の一つである。

バリカタンは、タガログ語で「肩と肩を並べる」という協力を意味する言葉で、比軍報道官は「演習は特定の国を意識したものではない」としつつも、明らかに中国を睨んだものであり、演習は5月20日までの約3週間にわたり行われる。

本演習は、米比両軍のほか、オーストラリア軍とフランス軍が初めて正式参加し、日本（自衛隊）をはじめ、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟国のマレーシアやベトナム、ブルネイなどを含む14か国がオブザーバー参加している。

中でも米軍は、陸軍、海軍・海兵隊及び空軍から約1万1千人を動員し、バリカタン全参加人員は、併せて1万7千人を数える。また、比軍の責任範囲を、領海を越えて排他的経済水域（EEZ）にまで拡大することを目的とした包括的群島沿岸防衛構想（Comprehensive Archipelagic Coastal Defense Concept）と呼ばれるフィリピンの新軍事戦略の下で行われており、本演習は、冷戦時代の海軍間の小規模な演習から、規模と範囲の両面で飛躍的に拡大した多国間大規模演習へと発展している。

バリカタンは、中国から軍事的圧力を受け、南シナ海の発火点となる恐れがあるセカンド・トーマス礁やスカボロー礁を念頭に、また、台湾有事も想定して、パラワン島の西海岸と南シナ海、そしてバシー・ルソン両海峡に近いルソン島などを舞台として、対艦作戦や対上陸作戦、島嶼奪還作戦、多国間海上作戦などの演習が行われる計画である。

本演習は、比軍がより先進的な米軍から多くの教訓を学ぶチャンスをもたらす防衛能力を強化するとともに、米比相互の連携要領や相互運用性を高める狙いがある。

そこで、米比の防衛協力強化の現状や米国のインド太平洋軍事戦略に基づく作戦構想のうち、本演習で計画・適用されている訓練について概観することとする。

○米比の防衛協力の強化

米比は、1951年に相互防衛条約を締結した。それに基づき、1998年に「訪問米軍地位協定（VFA）」を取極め、2014年に「防衛協力強化に関する協定（EDCA）」に署名した。

EDCA は、フィリピン軍の能力向上、災害救援などにおける協力強化、米軍のローテーション展開、米国によるフィリピン国内拠点の整備、装備品・物資などの事前配置を可能と

するものである。(傍線は筆者)

本協定に基づき、2016年3月、防衛協力を進める拠点として米国が5か所の比軍基地を使用することについて合意した。さらに、2023年2月には、米比国防相が共同で、EDCAの拠点として新たに4か所を指定したことを発表した。

これで、フィリピンにおいて米軍が使用できる駐屯地・基地は、併せて9か所になった。

9か所の駐屯地・基地は、北部のルソン島に陸軍駐屯地2か所(うち、1か所は大型飛行場あり)、海軍基地2か所、空軍基地1か所、南部のマクタン島とミンダナオ島にそれぞれ空軍基地1か所、南シナ海に面したパラワン島に空軍基地1か所、バラバク島に海軍基地1か所の配置になっている。

これらの配置は、明らかに中国軍の行動への対処を考えたものと見られ、特に、米海軍にとってバシー・ルソン海峡や南シナ海に向けた作戦拠点を想定していることが容易に察せられる。

また、米空軍の作戦構想である広域展開基地システム(DABS)の一環として6か所の駐屯地・基地が使用できる点も注目され、「バリカタン2024」では、これらの駐屯地・基地が訓練・演習のための集結地・展開地として利用され、米比防衛協力を強化する基盤の役割を果たすのは間違いない。

○米軍の作戦構想の実戦的適用

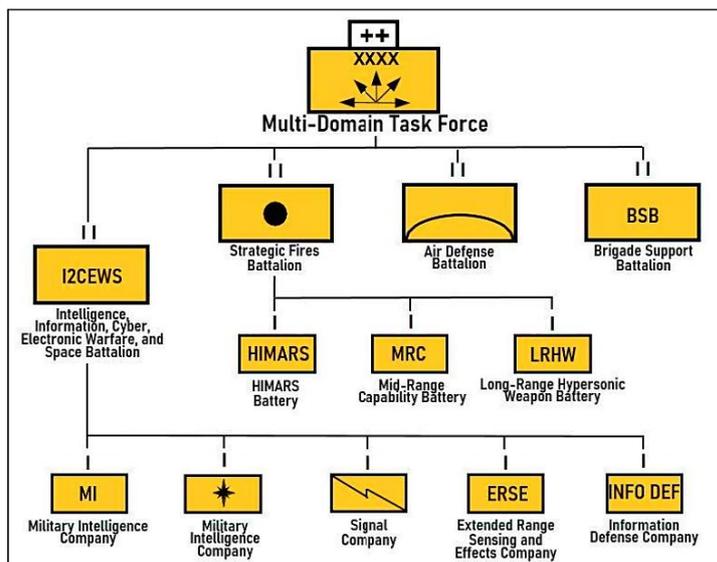
<米陸軍>

中国の「接近阻止／領域拒否(A2/AD)」戦略に対抗する米国のインド太平洋軍事戦略における米陸軍の役割は、統合作戦レベルの「エアシー・バトル(ASB)」構想の下、海兵隊とともに第1列島線国に展開し、同盟国・友好国の領土防衛に寄与するとともに、主として敵基地攻撃や対艦・対空ミサイル等をもって中国海・空軍の侵出を阻止することである。

その作戦構想は、マルチドメイン作戦(MDO)と呼ばれ、MDOを推進する改革・近代化の中心組織がマルチドメイン任務部隊(MDTF)である。

MDTFの組織編成は、次図の通りである。

米陸軍のマルチドメイン任務部隊（MDTF）の組織編成



<出典> US Congressional Research Service, “The Army’s Multi-Domain Task Force (MDTF)”, Updated April 19, 2024

MDTFは、戦域レベルの機動部隊として設計されたものであり、敵のA2/ADネットワークの全てのドメインに対して、精密効果と精密射撃を同期して及ぼすことができる。また、MDTFは、戦域レベルから戦略レベルまでの拡張性を持ち、統合任務部隊司令官の要求に応じてカスタマイズすることが可能である。

現在、米陸軍は、5個のMDTFを整備目標としている。そのうち、すでにインド太平洋に2個、欧州に1個の計3個MDTFを配置しているが、インド太平洋にもう1個配置する予定で、他の1個は米中央軍の戦域（中東）に配置される可能性が高い、とウォーマス米陸軍長官の発言として伝えられている（Defense News、2024年2月28日付）。

このように、MDTFの戦力配分に当たっては、インド太平洋が重視されており、その編成装備の概要は次記の通りである。

- ・I2CEWS（諜報、情報、サイバー、電子戦、宇宙）大隊は、2個のMI（軍事情報）中隊、各1個のSIG（通信）、ERSE（長距離センシング・影響）及びINFO DEF（情報保全）中隊から編成されている。諜報戦、情報戦、サイバー戦、電子戦及び宇宙戦を遂行するとともに、SF（戦略砲兵）大隊及びAD（防空砲兵）大隊の作戦を支援する。

- ・Strategic Fires Battalion（戦略砲兵大隊）は、HIMARS（高機動ロケット砲システム）中隊、MRC（中距離能力）中隊及びLRHW（長距離極超音速兵器）中隊から編成されている。いずれの中隊も、INF禁止条約で禁じられていた中距離（500～5500 km）の地対地ミサイルを装備し、敵の防空・野戦砲兵や弾道ミサイルシステム、指揮統制組織などを目標に長距離精密射撃を行うことができる。

この中の、長距離極超音速兵器（LRHW）は、射程が 2776 キロと推定されている。グアムに配置しても中国大陸を射程圏内に収めることはできないが、第一列島線、例えば日本の九州、台湾、フィリピンに配置すれば、中国大陸の主要エリアをカバーすることができ、中国にとって大きな脅威となるのは確実である。

また、中距離ミサイル能力（MRC）システムは、既存の Navy SM-6 と UGM-109 Land Attack Missile を地上発射型に改修したもので、射程約 1800 キロあり、中国大陸を十分に攻撃することが可能である。（マニラから広州市までの距離は約 1250 キロ）



<出典> Breaking Defense, 2021.05.12、地図：国土地理院を使用して筆者作成

・ Air Defense Battalion (防空砲兵大隊) は、暫定機動近距離防空システム (IM-SHORAD) などの間接火力防護能力 (IFPC) を装備すると見られ、防空 (AD) 及びミサイル防衛 (MD) に従事し、敵航空機や弾道・巡航ミサイルを撃墜し、我が作戦空域への侵入を阻止して統合任務部隊を防護するとともに、航空優勢を獲得して行動の自由を確保する。

・ BS B (旅団支援大隊) は、MDTF の後方支援部隊であり、同構成部隊に対し、整備や輸送、補給などの兵站支援を行う。

今般のバリカタンでは、MDTF の MRC システムが初参加しており、比軍関係者は、演習期間中に同システムの実射訓練が行われることを認めている。

チャールズ・フリン米太平洋陸軍司令官（陸軍大将）は 2024 年 4 月、在日米大使館で一部メディアの取材に応じ、「中距離（ミサイル）能力を持つ発射装置が、間もなく、（アジア太平洋）地域に配備される」と述べており、バリカタンはその最初のテストケースとなる。

<米海軍・海兵隊>

米海軍及び海兵隊は、敵の A2/AD 戦略に対抗し、これを撃退して海上優勢を確保しようとする作戦を行う。その作戦は、海軍による「分散海上作戦 (DMO)」、海兵隊による「遠征前進基地作戦 (EABO)、そして海軍と海兵隊が協同して行う「紛争環境下における沿海域作戦 (LOCE)」に代表される。

海軍は、空軍とともに「エアシー・バトル (ASB)」構想の中心的役割を果たし、長距離精密攻撃や水中戦によって中国の海・空戦力や C4ISR、継戦基盤などを撃破して防衛作戦の目的を達成する。海兵隊の EABO は、基本的に海軍の DMO をサポートする構想である。

EAOB に任務・役割は、重要海域の拒否・支配や陸上作戦、防空・ミサイル防衛 (AMD)、(敵艦艇) 打撃作戦、対潜水艦戦などを行うことである。

その行動は、小規模の海兵隊部隊が隠密裡に敵射程内にある作戦上重要な島嶼等に中型揚陸艦 (LSM) や垂直離発着機オスプレーなどを使って機動展開し、敵の海洋アセットを目標に対艦ミサイルや対空ミサイル等の火力を発揮して制海 (SC) 及び海洋拒否 (SD) の獲得維持に寄与する。そして、当該地での任務の完遂に伴って別の場所への迅速な機動を繰り返す。周辺海域へのアクセスが陸上の敵から拒否されるリスクを相手に課すというコンセプトで実施される。

今般のバリカタンでは、C-130 とエアクッション揚陸艇 (LCAC) を介したパラワン島へ高機動砲ロケットシステム (HIMARS) を迅速に配備する急速浸透訓練が行われる。

また、演習の前半では、2 隻の水陸両用艦や LCAC、CH-53E 重量物輸送ヘリコプター、新型水陸両用戦闘車両が参加し、南シナ海に面したパラワン島の西海岸で水陸両用強襲訓練が行われる。後半段階でルソン島北部での対上陸訓練が行われる予定である。

<米空軍>

空軍は、海軍と協働して「エアシー・バトル (ASB)」構想の中心的役割を果たし、長距離精密攻撃によって中国の海・空戦力や C4ISR、継戦基盤などを撃破して統合作戦構想の目的を達成する。

その具体的な作戦構想は、「迅速機敏な戦力展開 (ACE)」と、それを成立させるための「広域展開基地システム (DABS)」である。

前述の通り、米空軍は、フィリピンにおいて DABS の一環として 6 か所の駐屯地・基地が使用できことから、バリカタンで ACE のための訓練・演習の絶好の機会を得て、その態勢整備が急速に進展するものと見られる。

また、米海・空軍は、比軍との統合防空ミサイル防衛 (IAMD) 演習や多国間海上作戦を実施するなど、多くの画期的な訓練に参加すると見られる。

比軍は、日米共同方面隊指揮所演習 (YS 演習) や海上自衛隊演習などにオブザーバー参加している。

マルコス大統領は4月15日、バリカタンを巡って「日本の参加は良い動きとなる」と述べ、来年以降の正式参加に期待感を示した。

このように、今後、中国の覇権的拡大を睨みつつ、日米比に台湾を加えた4か国による安全保障・防衛協力を強化する「統合島嶼防衛構想」を進めることが、一段と重要性を増している。

○日米台比による「統合島嶼防衛構想」を推進せよ

中国は、尖閣諸島や台湾のみならず、南シナ海でも南シナ海仲裁裁判の裁定を無視し、南沙諸島にある周辺国と係争中の7つの岩礁の埋立て・人工島化・軍事基地化をすでに完成させ、さらに、近接するフィリピンのセカンド・トーマス礁にまで魔の手を伸ばし始めている。

このように、中国の脅威に直面しているのが、日本、台湾、フィリピンからボルネオ島へと繋がる「第1列島線」国であり、これらの防衛を連結し、そこに米国がコミットする「統合島嶼防衛構想」こそが、中国の覇権的拡大の野望を抑止・対処する上で、最も重要な取り組みであるといえよう。

それを基盤として、クアッド (Quad) やオーカス (AUKUS) の多国間ネットワークに加え、韓国やベトナム、さらにフランス、カナダなどを糾合した広域かつ多角的な「統合抑止 (Integrated Deterrence)」体制を構築し、将来的には、インド太平洋版 NATO への拡大を視野に同盟戦略の一層の充実を目指すべきであろう。

また、ウクライナ戦争が示すように、アジアと欧州の安全保障は連動しており、この際、NATO/EU との協力連携を強化することも重要である。

岸田文雄首相は日本時間の4月12日、ワシントンで、米国のジョー・バイデン大統領、フィリピンのマルコス大統領との3か国による初めての首脳会談に臨んだ。

会談では、中国による南シナ海での攻撃的な行動や、東シナ海での一方的な現状変更の試みへの深刻な懸念を共有した上で、3か国の海上保安機関による合同訓練に加え、海域のパトロールを行うなど、海洋安全保障協力を強化していくことで一致した。

この際、自衛隊と各国海軍の合同演習や、日米両国によるフィリピン軍の近代化支援といった防衛協力を推進していくことも確認した。

また、バッテリーの材料に欠かせないニッケルなどの重要鉱物や半導体の供給網 (サプライチェーン) の構築など、経済安全保障分野での協力を強化することも申し合わせた。

さらに、フィリピンのルソン島周辺の航路など、インフラの連結性を高める回廊プロジェクトを立ち上げ、港湾施設といったインフラ整備を推進していくことでも合意し、日米比3か国での戦略的トライアングルの形成に向け連携を強化することを確認した。

同時に、このような取組みを通じて、日米台3か国の安全保障・防衛面の連携メカニズムを構築することも喫緊かつ不可欠の課題であり、日米台比4か国を連結した「統合島嶼防衛構想」を強力に推進することが、中国の野望を絶つ最強かつ最優先の選択肢となろう。